

広報まちだ2024年6月15日号 特集記事インタビュー

日常的に車いすを使用している大学生の玉置さんと、
カフェ・レストラン「44APARTMENT 薬師池店」の須賀さんにお話を伺いました。



須賀さん

●44APARTMENT さんの店内は通路などに余裕を持たせた構造になっていますが、バリアフリーを意識して作られているのですか。

お店が公共の公園の中にあるため、元々バリアフリー等を意識して作られています。同じ公園内にあるインフォメーション・直売所棟の目の前にはスロープやエレベーターがあり、店内も段差がないような作りになっています。

お店には車いすを使用している方だけでなく、聴覚障がいのある方が常連でいらっしゃるのですが、全員に聴覚障がいのあるご家族がリピーターで来てくださっていて、筆談でやり取りをしています。また、最近手話を覚えたスタッフがいて、お客様と手話で会話できる機会がありました。

先日、聴覚障がいのあるお客様とスタッフが手話で会話していたときに、偶然他の聴覚障がいのあるお客様がその姿を見てお客様同士の会話が広がった、ということがありました。

手話を覚えたスタッフは、学校で習ったのではなく、障がいのある方に寄り添うための方法を考えていて、お客様と会話できるように独学で覚えました。

さまざまな方に安心感を持って来ていただけていることがすごくうれしいですね。

●玉置さんは日常的に車いすを使用しているのですか。

玉置さん

基本的に移動は電動車いすを使っていて、家の中は歩いて生活しています。

高校生の時から毎日電車で通学していますが、1人では電車に乗れないので、毎日駅員さんにスロープをお願いして乗っています。

一部の駅では、ホームと電車の隙間を埋める工事がされているんです。私の家の最寄り駅と行先の駅が両方工事されていたので、高校生の途中からは、完全に1人で電車に乗れるようになっていました。大学への通学は、工事がされてない駅を使わないといけないので、ま

た毎日スロープを頼んでいます。だんだんバリアフリー化が進んできているなど感じています。

ただ、駅員さんに頼むときに、他にも車いす利用者がいると、人手が足りなくてとても時間がかかってしまいます。ついこの間も、電車に乗りただけなのに「1時間待ってください」と言われてしまったことがありました。朝早い時間だったので、学校に間に合わない、ということになってしまって。毎日余裕を持って家を出るように気をつけています。

● 日常生活の中で「もう少し配慮があるといいな」と気になっていることはありますか。

玉置さん

車いすを使用していると、お店に入れないことが多いです。お店の通路の幅が狭くて、ギリギリ通れそうでも「商品を壊しちゃったらどうしよう」と思ってしまいます。コンビニでも、通路の幅が狭かったり、幅は大丈夫でも、その通路に物が置いてあったりすることもあります。そういうことがあると、入るのをためらってしまいますね。

工夫すれば車いすでも入れるかなと思っても、どうしても店員さんも忙しい中頼むのも申し訳ないなと思ってしまったりして。なので、店員さん側から声かけてもらえると安心して入れるかなと。そういうところでも理解が進んでいくくれたらなと思います。

● 10月に施行される「町田市障がい者差別をなくし誰もが共に生きる社会づくり条例」に関連して、お二人に「こんな社会になってほしい」という思いを伺います。

玉置さん

私は、やっぱり「障がいがある理由で何かを諦めないといけない」という状況が変わってほしいなと思っています。

私は小中高と町田市内の普通学級で、健常者の友達と一緒に過ごしてきました。

車いすを使用していると特別支援学校などの選択をする子が多いと思いますが、私は周りの友達や先生の理解があったおかげで普通学級にずっと通えていたなと思っています。ただ、いろんな障がいのある方と関わってきて、本当に選択肢の少なさを感じてきているので、障がいがあることで何かを諦めないといけないという状況を変えていきたいと思っています。

須賀さん

「スタッフから声かけてもらえたらうれしいな」など、障がいのある方の声を直接聞く機会があまりないと思っています。車いすを使用していて足が不自由とわかる方もいらっしゃいますが、直接話さないと相手の状況が分からないことが多いです。

「こうしてくれたらすごく安心する」「お店にこういうものがあって入りにくいな」など、

皆さんの気持ちを理解できる場があれば、備えておくことができると思うので、知るきっかけをとにかく増やしたいなとすごく感じています。

●お二人が今後取り組みたいことはありますか。

玉置さん

私は中学校の時まで性格が今よりすごく内気で、友達にもなかなか頼れない状況がずっとありました。病気の話をした時に、友達から「聞いちゃってごめん」と言われることが多くて、周りから「自分とは違う存在」と思われているんだろうな、という思いがずっと自分の中であって、他の友達と仲良くしづらいことがありました。

中学校の時にあまり自分の性格を出せなかったり、自分らしくいられなかったという経験があったので、高校に入った時には、入学式の次の日の学年集会で個人的に時間をもらって、みんなに「いい意味で自分と違う存在っていう風に思わないでほしい」「みんなと一緒にやっていきたいこともあるし、3年間高校生活を楽しみたいから、変に気を遣いすぎないでほしい」ということを伝えました。

そうしたら、自分もすごく学校生活を送りやすくなったというか、気持ちの面ですごく軽くなりました。

自分がそんな経験をしたからこそ、次は他の障がいがある方たちに「気遣いすぎなくても大丈夫だよ」「ちゃんと伝えれば理解してもらえるよ」ということを伝えていきたいなと思っています。

高校生の時も芸能活動や講演会をさせていただける機会がありましたが、大学生になってからももっと力を入れて、自分から発信していくことを頑張っていきたいなと思っています。

須賀さん

記念日をお祝いしたい、友達と楽しい時間を過ごしたい、何かショックなことがあって元気をもらいたいなど、お客様がお店に来る理由はそれぞれ違っていると思います。そのお客様が自分らしく、リラックスして楽しんでもいただけるように、相手の背景を拾うということをすごく意識しています。

食事を提供する時に「今日はどうして来てくれたんですか」や「この前もこのメニューでしたよね」など、些細な会話を心がけています。

飲食店はどうしても作業的になってしまいがちですが、お客様1人1人を見て、この人にとって何をすればお食事の時間を楽しんでもいただけるかを追求したいと思っています。

私はこれまで身近に障がいのある方はいませんでした。今のカフェで働くようになり接する機会が増えたなと思っています。近隣から障がいのある方が来てくださることも多くあ

ります。

スタッフとして、そのお客様にできることをよく考えつつ、同じ空間にいる他の方々に理解を促進するような声掛けをしていけたら、一緒にいいカフェの空間で過ごせるのではないかと考えています。そのための知識をつけてサービスに活かしたいと思っていますです。

●このインタビューを読んだ皆さんへのメッセージをお願いします。

玉置さん

私も知る機会を作ることが大切だと思っています。何を手伝っていいかも分からないことがあると思いますが、過度な配慮は求めていないという障がい者の方もすごく多いと思います。

例えば、飲食店で車いすユーザーの方が入ってきた瞬間に、店員さんがいすをどかさる場合があると思いますが、もしかすると車いすユーザーの方の中でもいすに座って食事を取りたい方がいるかもしれない。本当に人それぞれ違うと思うんですよね。

何も聞かずに一方的に「こうしてあげないと」というイメージだけで何かするのではなく、コミュニケーションを取って、本人の意思を確認した上で、どうするかを模索していくことが大切です。

まずは知るきっかけを作ること。そして、どんな配慮が必要なのか私たち当事者も伝えていく努力が必要ですし、配慮をしてくださる方たちも、どういう風にしてほしいかを寄り添って聞いてくださるとうれしいなと思います。

安心できる街づくりは、みんなで作っていくものだとしてすごく感じているので、そういう風に1人1人の意識が変わっていったらうれしいなと思います。

須賀さん

公園の中にある、地域に根差したカフェ・レストランとして、幅広い年代の方や障がいを持った方を含めて、みんなそれぞれがちゃんと居心地の良さを体感でき、ストレスを感じない場所を提供していきたいと思っています。

一度いらっしゃったお客様への配慮を覚えておいて、次回に活かすことですか、きちんと会話をして、必要な配慮をスタッフみんなが理解して、だれもが遠慮せず、安心して来ていただけるような場所をみんなで作っていきたいと考えています。

ぜひ、西園にある 44APARTMENT 薬師池店にお越しいただき、居心地の良い空間でおいしい食事をお楽しみください。